

One Family ～沖縄教区・つながる心、福島支援プログラム～

今回は、沖縄教区からの応援のお話です。

郡山市に在住する人はみな、多かれ少なかれ放射能と闘っています。見えない、匂わない、感じられないからこそ安全を確信できずにいるのです。郡山聖ポール幼稚園の先生たちも例外ではありません。子どもたちを守るにはどうすれば良いのか、日々葛藤の中にいます。とりあえずできることは何でもしましょう、というのが今のスタンスです。日常業務に加え放射能対策が強いられます。毎日数回行われる入念な雑巾がけもその一つ。外遊びも、させる、させない、その日の放射線量に心を悩ませなければなりません。外遊びのできない日は、時間の過ごし方に工夫が必要です。このような状態が3年8か月も続いています。終わりの見えない闘いです。蓄積されて行く先生たちの心身の疲労は計り知れません。

このような状況を沖縄教区の方々にお伝えしたところ、郡山聖ポール幼稚園への先生の応援派遣が決まり、10月23日～11月2日、沖縄教区支援室長の岩佐司祭を初めとして、幼稚園教諭の座安ゆかりさん、真栄城美子さん、保育士の仲田菜な子さんが、全期間或は一部期間来て下さいました。毎日の保育後の振り返りやお願いをした原稿に、子どもたちと過ごした楽しい経験と共に、いろいろな思いが言葉になってちりばめられています。ご紹介します。

- 放射能の本当の怖さを知らない私がありました。どんな対策をしてもすり抜けていく放射能。地元の人が強く持っている、どうしようもない悔しさを、ここに来て初めて実感しました。
- 住宅の裏にきれいに並べられた黒い袋。汚染土と伺いました。日本は大変なことが起きているのだと、あらためて認識しました。
- こんなにきれいで静かな街が、人々が口に出せないたくさんの思いを抱えているなんて…。
- 一年中外遊びを楽しんでいる自園の子ども達を思い出し、せめて陸続きだったら、長期休業日にみんなを受け入れられるのにと、切なくなりました。
- 沖縄では見られない公園が続き、羨ましく思いましたが、後に、汚染のため思い切り利用することはできないと聞かされました。
- 支援をしたいという気持ちも大切だけれど、福島のことを忘れずに、一緒に“今”を過ごしていることが“支え”になるのだと思いました。

(原発と放射能に関する特別問題プロジェクト 池住 圭)